

令和4年度 第2回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和4年8月31日（水）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市役所庁舎 6-1 大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、川島委員、横山委員、武藤委員、伊藤委員、加藤委員
- 4 招聘者 岐阜聖徳学園大学准教授 後藤 綾文 氏
- 5 傍聴者 一般3名、報道関係者2名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議
「誰一人取り残さない個々の可能性を支える学び」
(3) その他
- 7 議 事

(13時30分開会)

○佐藤事務局長

ただいまから、令和4年度第2回岐阜市総合教育会議を開会いたします。

本日、司会を務めさせていただきます教育委員会事務局長の佐藤でございます。よろしくお願ひいたします。

本日は、柴橋市長、水川教育長及び川島委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員、加藤委員に御出席をいただいております。

また、会議の招聘者といたしまして、岐阜聖徳学園大学准教授 後藤 綾文 様に、御多用の中、御参加を賜っております。

それでは、皆様、本日はよろしくお願ひいたします。

これより着座にて失礼いたします。

傍聴者の皆様に申し上げます。傍聴に際しましては、受付で配付いたしました傍聴人の遵守事項に記載した事項の遵守をよろしくお願ひいたします。

次に、本日の資料の確認をさせていただきます。皆様のお手元には、次第及び席次表、資料1、2及び参考資料1、2をタブレットに収納し、御準備しております。不足等ござ

いましたら、挙手をお願いいたします。次第及び席次表、資料1、2及び参考資料1、2でございます。

それでは、次第に沿いまして会議を進めます。

まず、柴橋市長より御挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

○柴橋市長

皆様、こんにちは。令和4年度第2回岐阜市総合教育会議に御出席いただきありがとうございます。夏休みが終わり、学校も始まりました。まだコロナ禍は続いておりますが、先生方においては、様々な苦勞をされながらも、子どもたちの安心・安全、そして学びをしっかりと守って頂いていることと思います。本日は、「誰一人取り残さない個々の可能性を支える学び」というテーマで、委員の皆様から様々なご意見、ご助言を賜りたいと思っております。

また、後藤先生におかれましては、お忙しいところご出席いただきありがとうございます。先生からどういったお話が聴けるか、楽しみにしております。

先日、草潤中学校に伺った際に卒業生と話をしたのですが、その方は、自分たちのペースで、自分が学びやすい環境で学んでいくといった、自分で選べるということがすごくよかったということを言っていました。既存の学校では、集団生活の中で様々なことをやらなければなりません。草潤中学校の一つの特徴として、学ぶ場、学ぶ時間、担任の先生等多くの事を選ぶことができるといったことが、子どもたちにとってとてもよい環境であるということをご直接聞くことができ、とても参考になりました。

その時の経験も生かしながら、本日は議論を深めてまいりたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

次に、次第の2、協議に移ります。

本日のテーマは、『誰一人取り残さない個々の可能性を支える学び』についてでございます。

では、まず、事務局より御説明申し上げます。

皆様、タブレット内の資料1を御覧ください。

○星野学校教育審議監兼学校指導課長

(草潤中の成果と他校への展開について 説明)

○佐藤事務局長

続きまして、後藤様より御講演を賜りたいと思います。

皆様におかれましては、タブレットの資料2を御覧ください。

それでは、よろしく願いいたします。

○岐阜聖徳学園大学 後藤准教授

岐阜聖徳学園大学の後藤です。よろしく願いいたします。

本日は、不登校の子どもたちを受け止め学びへ向かわせるために学校ができることとは、についてお話しします。私は、大学で教員を目指している学生に教育相談や生徒指導の授業をしており、東海3県でスクールカウンセラーをしてきた経験もありますので、そういったところからお話しさせていただきたいと思います。

本日は、子ども理解と不登校児童生徒への支援について、私から2点提案させていただきます。

子ども理解は、子どもたちの生きづらさや所属感のなさとはどういうところにあるのか、ということと、先ほど草潤中学校のお話に出てきたところもありますが、多様に認められるということの重要性についてお話しします。そして、不登校児童生徒への支援に関する岐阜市の施策について、心理学者の視点からとカウンセラーの視点からお話しいたします。

私は、子どもたちと関わっている中で、主に学校の中での子どもたちの所属感のなさを感じております。自分には秀でたものがないから先生にも周囲にも認められないということ子どもから言われたことがあり、また、大学生も小中学生の頃を思い出して教えてくれます。とても衝撃的な大学生の言葉がありました。自分は小学生のとき頭が悪く、勉強が苦手で、そんな自分の話を先生が聞いてくれるとは思っていなかったと私に教えてくれたのです。勉強が苦手なことと先生に話を聞いてもらえるかは別の次元のことだと思いますが、子どもたちは、先生が思っているよりも、勉強ができないこと、そして先生からどう見られているかということ非常に気にしているのです。クラスメイトに合わせておくと安心というのは、クラスメイトがこう言うのであれば、自分もこう言うておいたほうが

嫌われないし、否定されないから合わせておくというものです。だからこそ、仲のよい人とだけ関わることが安心になります。仲のよい人とだけ関わることが安心というのは、反応が予想できるからです。否定されないことが想像できるので、とても安心です。しかし、このようなことを頭の中で考えながらクラスの中で過ごしているので、自分の居場所だとはなかなか感じにくいです。友達の悪いところを挙げて自分の評価や立ち位置を上げるといのは、誰かを下げることによって隣にいる友達と仲よくできるというものです。それによって自分の居場所をつくるのです。何故このような関わり方をするのかというと、それは、自分を肯定する評価軸が少ないからです。では、その評価軸は一体誰が与えているのでしょうか。子どもの評価軸を少なくしているのは誰なのでしょう。

他にも、道徳教育や特別活動、いじめの予防の活動が学校現場でされており、子どもたちは上手に答えてくれます。他者を思いやる、他者のことを考えることは大事だと分かっています。ですが、子どもたちの中には、あの子はリーダーをやっているすごいし、このクラスも本当に悪いクラスじゃないけど、自分はクラスで認められていない。と感じている子もいます。この違和感、ここにいらっしゃる先生方はわかりますか。悪くないクラスなのに自分は認められていない、そんな感覚を彼らは持っていますし、人の命は大切であることも勉強して分かっています。しかし、自分の命は大切だと思っていないのです。友達が悩んでいたなら相談に乗り、話を聞いてあげるのですが、自分は死にたいと思っている子どもたちに出会います。そして、小中学校でのネガティブな経験や所属感のなさというのは、大学生になっても抱えたままです。大学生になっても、友達ができないと相談に来ますし、小中学校のネガティブな経験を引かずのまま解決できず、大学でも居場所のない様子の学生もいます。それだけ小中学校の経験というのは大きいものだと思います。

では、多様に認められることがなぜ重要なのでしょうか。子どもたちには、失敗経験や叱責を受けた経験があったり、対人スキルが不十分であったり、発達障害がある等、それぞれに特性や苦手さを抱えています。また、家庭環境がしんどい子もいます。そうした状況では、評価軸が少なければ少ないほど、自分はいてもいなくてもいいと感じます。そうすると、物事に対する考え方、見方が否定的なものになりやすく、一面的なものになりやすいです。私たち教員は、子どもたちに多様性を認めることを教えていますが、不登校児童生徒の支援を考える際に、まずは私たち自身が子どもたちの多様性を認めているのかを考えなければならないと思います。多様に認められるというのは、先生やクラスのみんなが自分を認めてくれるということです。それは、秀でたところでなくていいと思います。

私たちは、子どもたちが頑張っているところを常に探し、見つけていく必要があると思います。クラスみんなが、自分が分からないこと、できないことを教えてくれたり助けたりしてくれたりすることを、小中学校を通して沢山経験させていただきたいです。そうすることで、自分はここにいてもいいということを感じ、物事に対して前向きに考えることができるようになります。自分のことを認めてもらうことで、初めて自分のことも周りのことも多様に見ることができます。なぜ、このよい循環を学校現場で繰り返していただきたいかというと、不登校に至った子がクラスに戻ってきたときに、クラスの環境が休む前と同じだった場合、頑張って出席したものの、やはり学校に行ってもつらいのなら行かないほうがいいかなとなるからです。学校に行くことが全てではありませんが、学校に行ったときに、様々なところをみんなが見てくれたという経験をしてもらうためには、休んでいる間にクラスをどうつくっていくかが大事になります。そして、この多様に認められること、居場所を感じさせることがなぜ大切かというと、これが将来的な自死や自傷行為の予防にもつながるからです。こちらは、現在海外や日本において自傷・自殺予防に有効な考え方だと言われているもので、この3つがそろそろ強く死にたいという気持ちが高まると言われています。1つ目は、身につけられた自殺潜在能力です。これは、家庭環境が大きく影響しますが、そもそも自傷行為、拒食や過食、精神障害があることです。2つ目は、所属感の減弱です。これは、自分の居場所がない、所属感がないという気持ちになることです。3つ目は、負担感の知覚です。これは、自分がいると先生たちの迷惑になっていると感じることや、友達に、私がいなくてもあの子とお話できると感じる事等、自分が重荷になっているのではないかと感じる感覚のことです。この3つがそろそろ、人は強く死にたいという気持ちが高まると言われています。

この中で学校の先生方が対処できるのは、2つ目の所属感の減弱を抑えることと、3つ目の負担感を感じさせないことです。やはり自殺潜在能力はなかなか変わりません。家庭環境が変わらないことは、ここにいらっしゃる先生方も御存じかと思います。だからこそ、学校などに自分の居場所があり、認められる感覚があるというだけで、将来的な自死を予防することができます。小中学生の自殺企図だけではなく、大人になってからの自殺予防にもつながりますので、小中学生の頃から対処しておくことが大切になってきます。

子どもたちを多様に認めるという点においては、担任の先生だけでなく、周りの大人が果たす役割も大きいと思います。担任の先生だけでなく、T T、養護教諭、管理職といった学校の中の大人だけでなく、家庭や地域でも子どもたちを見ていると思います。私は、

草潤中学校に関する御説明を聞いて思っていました。子どもたちをどのように認めるかを改めて考えていかなければならないと思います。休んだ後どうするかも大切ですが、休む前にどうしていくか、また、周りの子どもたちをどうしていくかも考えていきたいと思っています。

まず、不登校になってしまった子への対応についてです。不登校になった原因や問題は1つではないし、本人もはっきりとわからない場合が多いので、原因や問題に直面させることは難しいです。また、原因や問題に注目し過ぎるあまり、解決できず疲れてしまうということになりがちです。そうではなくて、子どもや保護者がもともと持つ強みや既に持っている力を認めることが重要です。学校を休んだことが悪い、ということではなくて、お休みする、お休みしたいと言える力が既にその子にはあって、休むことを家族に話せるだけの関係が家庭内で築けていたとも捉えられます。悩みや問題を減らすよりも、できるところやよいところを増やして、相対的に問題が小さく見えるようにすれば、子どもたちは頑張ろうと思えるのです。カウンセリングにおいて、私たちは、スライドの図の赤い部分を減らすことやそれに対応することを目的に相手と話をするわけではありません。スライドの図の青い部分を何とか認めて伝えていくのです。そうすることで、本人が赤い部分に注目せずに、少し頑張ろうかなと動き出してくれるようになる、それがカウンセリングの効果なのです。先生方においても、子どもたちをこのように見ていくことは必要かと思っています。そして、不登校の子だけでなく、クラスの中で問題を抱えている子をどう見るかも重要です。今話したことと同じように対応することで、その子たちが不登校に至る前に先生や友達にSOSを出せるようになると思います。

なぜ私が多様に見てほしいということだけをこれだけ強調するかというと、心理学では、人に対する見方は固まってしまうと言われているからです。この人はこういう人だと決めるほうが楽だからです。私たちは、子どもや保護者に対して、私たちの捉え方から判断した指導や関わり方をします。だからこそ、たった1回かもしれない例外を見逃すことがあります。その例外こそが子どもや保護者が一番見てほしいところです。それが見つけられず、コメントできないと、先生は分かってくれないと子どもは感じます。ですから、私たちはいつも多様に見ていくことを意識しなければなりません。私たちが子どもや保護者のことを固まった見方で見ているからこそ、子どものSOSを拾えないことがあります。また、子どものことを固まった見方で見ているからこそ、「そんなことないよ」、「大丈夫だよ」、という言葉投げかけてしまいます。先生は励ますつもりかもしれませんが、子ど

もは大丈夫ではないから打ち明けたのです。「分かるよ」、分かるのだったら初めから分かっていたほしいです。分かってくれないと思っているが、先生方や保護者に言ってみようということがあります。「どうしたんだ？いつもと違うじゃないか」、先生は励ますつもりで、いつも元気なのにどうしたんだと言っているかと思いますが、いつも楽しそうで、元気じゃないといけないのでしょうか。多様に認めるということは、決して秀でているところを認めることではなく、少し弱音を吐いたところも、苦手なところもそのまま受け止めるということだと思います。ですから、これはいつもを強調して、いつもにこだわって、いつもに固執している大人の見方なのです。「死ぬなんて言っては駄目」という言葉も、自殺予防の対応においてタブーなのは当たり前なのですが、学校現場では言われてしまいます。大人は、死ぬことは駄目だという価値観を持っているので、こういった声かけをしてしまいます。「人生はつらいことばかりじゃない」というのも、大人が子どもに対して、まだまだ人生は長いからという自分の価値観を押しつけているというところがあります。

次に、集団の中の個人に注目するということです。個別最適化という言葉はとても良い言葉だと思いますが、私は、集団の中で何となく動く子どもや、集団があるからこそ動く子どももいると思っています。良い意味でも悪い意味でも、集団の雰囲気の中で子どもは自分の行動を決めて動いています。子どもは、自分で自分の行動を選択しているように見えますが、周りの環境との相互作用で行動しています。クラスの中で、問題を起こす子どもがいるとしましょう。この子は支援が必要かと思います。集団の中で問題行動を起こすと、先生は集団ではなくて自分に向けてくれ、個別で話を聞いてくれます。先生も、この子は関わってほしい、認めてほしいのだという気持ちを感じ取り、個別で話を聞くことで落ち着くと捉えています。集団の中で問題行動を起こすのは、先生や周りの子どもに無視されるよりも、怒られるという反応だけでももらいたいからなのです。子どもは反応が欲しいのです。だから、ネグレクトよりも身体的虐待を受けた子のほうが精神状態はよいのです。殴られるけど、殴られるという反応を得られるからです。それだけ子どもの心は複雑で、問題を起こすことで先生に認めてほしい子がいます。集団の中で認められないからこそ、違和感のある行動を起こして先生に認められたいのです。では、問題を起こさない子どもは支援が不要なのでしょうか。こうした子どもが問題行動を起こさないのも、やはり先生や周りの子どもたちに認められたいからです。本当は学級の中で認めてほしいからこそ、先生の言うことを聞き、問題を起こさないことで訴えているのです。こうした子どもたちの心を見ると、本当にどの子が不登校になってもおかしくないのです。先生に

認められたくて落ち着いているように見える行動をしているだけかもしれません。そう考えると、不登校の子や問題行動を起こす子だけではなく、学級全体にどうやって関わっていくかを考えることが必要ではないかと思います。私たちは、あの子は仲間とうまく関わることができない、あの子は自己肯定感が低い、あの子は学校に来づらいついて考えてしましますが、子どもたちは集団の中で、どう先生に見てもらおうか、どう周りに見ってもらおうかを考えています。ですから、あの子に仲間がうまく関われない学級になっているのではないか、あの子の自己肯定感が低くなるような学級になっているのではないか、あの子が来づらいついて学級になっているのではないか、といった考え方をしなければなりません。こうしたことを現場の先生方にお話しすると、教師は生徒指導をしなければならず、いつまでも共感的に子どもたちの話を聞くことはできないのではないかという御質問をいただくこともあります。しかし、生徒指導上の評価軸で指導することと多様な評価軸で認めることは、共存します。共存させないから子どもたちがしんどくなっていきます。生徒指導上、社会性や基本的な生活スキルに関することについては、なぜ問題行動を起こしたかということについて子どもに聞いたうえで、指導することが必要だと思います。一方で、生徒指導上、指導したとしても、例えば、この子が何とか学級でやっているところを認めていかなければ、先生個人の評価軸に合う子だけが教室に来ることになってしまうかもしれません。だからこそ、分からないこと、苦手なこと、難しいこと、できないことを表現してもいいと子どもが思える学級にしていかなくてはなりません。学級づくりというのは、例えると前倅えをきれいに列に並んでやれることを目指すのかもしれませんが、緩くネットワークのように柔軟に子どもたちが関わり合え、子どもたちそれぞれの特性が見合える学級をつくっていくことが大切かと思います。

これまで話したことを踏まえまして、これからの不登校児童生徒への支援はどうあるべきかを考えてきましたので、お話しさせていただきたいと思います。

子どもたちにどういう力を伸ばしてほしいかを考えた時に、自分のできないことや分からないこと、しんどいことを少しでも誰かに話せるという力は、大人になってからもとても必要です。心理学では、それを援助要請と言います。文部科学省は援助希求という言葉を使っています。この援助要請のできる学校、学級を目指す教育をしていくことが有効ではないかと考えます。まず前提として、子どもたちは基本的に相談をしません。いくつかの研究のまとめですが、学習面、心理面を問わず悩みや不安がある小中学生は、40%から80%と言われていています。大抵の子どもは悩んでいるのです。いつも楽しいわけ

ではないのです。その中で誰にも相談しない子どもは、約40%います。60%は相談しているからいいじゃないかという考え方もありますが、誰にも相談しない子どもは、本当に精神障害に至る場合もありますし、相談しない中で不登校という決断をする場合もあるでしょう。または、荒れるほうの問題行動をすることで自分のしんどさを表現する子もいると思います。相談しないことで、自分で考える力がつくという見方もありますが、やはり相談しても良いかなという態度はできるだけ小さなうちから養っておく必要があります。研究では、中学生になると態度を変容させることがとても難しくなるということがわかっています。援助要請や援助希求という言葉聞いて、SOSの出し方に関する教育が思い浮かんだ方もいるのではないのでしょうか。ただ、SOSの出し方に関する教育で取り組んでいるのは、本当のSOSの出し方のごく一部であり、私は何より、その土台となる下地づくりの教育や、校内の環境づくりが大切だと思っています。これは、自殺予防だけでなく、学校への適応にも関わってくるところです。教科教育、仲間づくりは、学校の先生方が日々当たり前に行っているところですが、そこに対して援助要請の視点から様々なプログラムが組み込めるのではないかと考えています。生命の尊厳の理解や生き方の探求に関する教育、ソーシャルスキル教育、人権教育、いじめ防止、道徳等は、自分が困ったときに、まずは誰かに話し、相談できるという援助要請の力を軸にして整理できるのではないかと考えています。相互に認め合うことはすごく難しいことです。人に相談してよかったという経験が少しでもないと、相手は自分のことを助けてくれる人だという相手のよさも分かりません。助けてもらえる自分を自覚する経験がなければ、自分のよさや自分の存在意義は分からないのです。自分の弱さを相手が多様に認めてくれるという経験をさせるために、援助要請の視点からカリキュラムを整理していくことができるのではないかと思います。その際、発達段階に応じて獲得すべきことが違うことには注意が必要です。特に小学4、5、6年生から仲間関係が変わり、中学生になると、人に相談すること自体に否定的になってきてしまいます。ですから、その前の小学校低学年の段階で、先生が助けてくれたという経験をさせることが有効です。また、タブレットで動画を見ること等も考えられますが、個別ではなく学級全体で取り組むことに意義があります。なぜなら、学級として人の話を聞くことの重要性や相談に乗る方法等、多様に認めることのレベルをある程度一致させておくことで、誰に相談しても否定はされないという安心感が生まれるからです。実は、これは授業づくりにも関わっています。不登校に至る前に小さなことでもまずは援助を求めてほしいところですが、子どもは困ったときに、先生や周りの大人、友達に相談しよう

とはなりません。普段から、分からないことや少し困ったことに対して大人がどう反応しているかを子どもは見ていますので、悩むことや問題を抱えることは誰にでもあることや、あなたがその質問をしてくれたおかげで他の子も理解できたということ等、質問すること、相談することを大人が価値づけなければ、子どもが本当に困ったときに大人の顔は浮かびません。

現在、岐阜市が実証実験を行っている子どもの健康サポート事業について、私は、これも援助要請を受け止めるシステムの一つになると思っています。子どもたちの体調面や今の気分を回答するものが岐阜市でも始まることを伺って、面白いなと個人的には思っています。他県では、既に同様のものを導入している自治体もあり、子どもたちの様子や傾向をつかむ上で有用であることが分かっている一方で、気分の低い状態が何日続くと少し危ないのか、状態の判断に関して不明なところがあると思っています。学力や学習意欲、他の心理的な適応感なども合わせて調査、分析をすると、この事業の有効性がより明確になるのではないかと思います。また、こうして得られたデータは、担任以外の他の先生方と共有することが大切です。続いて、学校における支援体制についてお話ししたいと思います。岐阜市の不登校児童生徒数が、令和2年度から大きく増えていることについて、教育委員会で分析をされているかと思いますが、どうしてなのかを感覚ではなく、データで明らかにしていく必要があると思っています。生徒指導上の諸問題に関する調査のデータを新たな視点から分析し直して、真に不登校の実態や特徴を明らかにすべきではないでしょうか。また、不登校の主な要因のうち、無気力、不安の割合が全国の値とかなり差があるは少し不思議です。これが事実であれば、統計的に明らかに有意な差であり、岐阜市の先生だけが考え方が違うということも推測できます。先生方のチェックの仕方にもしかして何かあるのではないかと感じています。また、欠席日数別の不登校児童生徒数で、小学4、5、6年生から数が急に増えていることも気になります。この年代は、友達関係も変わってきますし、学習内容も難化しますので、そういった変化と不登校の傾向が関連しているのではないかなど、詳細に分析することで、より効果的な支援につながるのではないのでしょうか。例えば、低学年から高学年にかけての学習面が不登校の要因として大きいのであれば、その年代の学習をどうしていくかに重点を置いた不登校対策が考えられると思います。さらに教員研修もそこに特化した形にする必要があるでしょうし、そうしたエビデンスは、岐阜県の教員を目指している学生への教育にも生かしていけるのではないかと考えています。

現場の先生は、私のようなスクールカウンセラーを有効に活用できているのか、疑問を投げかけさせていただきます。先生から、とりあえず子どもの話を聞いてと言われることがあるのですが、とりあえずとは何でしょう。とりあえず今この子は何かすごく苦しんでいるから話を聞いてあげて、ということでスクールカウンセラーにつなげることがあると思います。子どもは、話を聞いてもらうだけで気持ちがすっきりするのですが、その子は本当にスクールカウンセラーに話を聞いてほしかったのでしょうか。担任の先生に、どんな相談か言っていましたかと尋ねると、それは聞いていないですとお返事が返ってくる場合があります。それで、子どもの話を聞いてみると、きっと私ではなくても担任の先生に聞いてもらってもよかったのだらうなという内容である場合があります。このように、子どもの相談内容を担任等が簡単にでも聞き取らずに、とりあえずスクールカウンセラーにつないでいる場合があります。分業といたらそれまでですが、担任の先生が、この人に話したいというように子どもたちから思われていないのかもしれませんが。そういった先生に話すくらいなら、あまり知らないけどスクールカウンセラーでいいか、ということで選んでいる可能性もあります。そして、スクールカウンセラーの報告の活用方法に関しても課題があると思っています。カウンセリングをして終了ではなく、その後に情報共有しなければならないのですが、情報共有するだけでなく、この先、この子にどのように接するとよいか、先生がどう関わっていくとよいか、または支援機関にどのようにつなげていくかを話し合うことが重要です。他には、落ち着いた環境で話のできる相談室がない学校もあります。周りに他の子どもたちがいる中で相談に来なければならないと、人目を忍んで来たい子にとっては、相談のしにくさにつながります。

まずはこうしたことに取り組むとともに、スクールカウンセラーのさらなる活用方法として、校内研修をスクールカウンセラーと一緒に考えて実施することや、ケース会議に参加してもらうといったことが考えられます。これは、実際に他の自治体で行われているものです。また、SOSの出し方に関する教育やソーシャルスキルに関する教育、教員研修にもスクールカウンセラーは関われると思います。子どもや保護者のカウンセリングだけで1日が終わってしまうと、こうしたことに取り組む時間はありません。中には、スクールカウンセラーを有効に活用できている学校もありますので、教育委員会で情報を集約し、各校に展開していけるとよいのではないのでしょうか。そして、スクールカウンセラーにもタブレットを配布していただけるとよいと思っています。先生と子どもの情報だけでなく、先ほどの実証事業で得られるデータ等もスクールカウンセラーが見られるとよいと思いま

すし、不登校の子どもたちに対して、オンラインでカウンセリングをすることも可能ではないかと思います。タブレットの導入で、スクールカウンセラーが子どもと関わる手段を増やすことができますので、支援の強化につながっていくのではないかと思います。

コロナ禍も相まって、不登校の児童生徒が増えています。これに慣れてはいけないと思っています。それは、コロナ前の既存の枠組みである、毎日決まった時間に決まった学校に行くという決まった生活があったからこそ、何とか適応していた子の中には、休校やオンライン授業になったことで、友達と会わなくなったけど楽しめないほうがいいんじゃないか、学校へ行かないほうが楽だ、学校が好きじゃなかった、ということに気づいた子もいると思います。さらに、タブレットが導入されたことでそれに素早く適応しなければならなくなりましたが、何か嫌だな、前のほうがよかったなというもやもやを抱えている子どももいると思います。こうした、新しい枠組みにすぐに適応しにくい子どもたちが、今こぼれ落ちているのではないのでしょうか。不登校というものが、これまでとは違った要因で増えてきていると考えられます。これは先生も同じです。この3年間で様々な変化があったと思います。子どもたちはこの3年間の変化についていっていますし、大人もついていっていますが、その状況は確実に先生の負担にもなっています。その様子が子どもにも伝わっているところがありますので、少し立ち止まれないかと学校の現場の先生を見て心配しているところです。

では、まとめです。不登校の子どもたちに対する個別の支援だけではなく、不登校の子どもたちが戻っていったその先、または不登校になる前もすごく大切です。先生の手によって、子どもたちが多様に認めてもらう経験を積むことが、自分や他者、物事を多様に捉え、精神的に落ち着くことにつながると思います。そして、先生や仲間とつながり、援助要請によって人に支えてもらった経験が、その子の居場所をつくっていきます。それが全体を通して新たな不登校児童生徒を生まない、そして、戻ってきた子どもたちをまた不登校にさせない支援になると考えています。

発表は以上になります。御清聴ありがとうございました。

○佐藤事務局長

後藤様、ありがとうございました。

後藤様におかれましては、この後も引き続き最後まで御参加いただきます。よろしくお願いたします。

これより事務局及び後藤様からの説明を踏まえまして、皆様から「学びの保障の観点から、不登校対策・不登校児童生徒への支援を更に推進していくために取り組むべき施策、方向性について」御意見を頂戴したく存じます。

では、教育委員の皆様からでございますが、いつもと順番を変えまして、本日は武藤委員、横山委員、伊藤委員、加藤委員、川島委員の順でお願いしたいと思います。

それでは、武藤委員、よろしくお願いいたします。

○武藤委員

後藤先生、貴重なお話を本当にありがとうございました。

最初に後藤先生に御質問をさせていただきたいのですが、後藤先生のお話の中で、所属感という言葉が出てきたと思います。先生は所属感という言葉、どのようなイメージ、意味合いでお使いになっているか教えていただけますでしょうか。私は、後藤先生は居場所がある安心感に近いイメージで使っているのではないかと勝手に思っていたのですが、所属感という言葉には、そこにいなければならないという強制を伴うようなイメージを想起させる部分もありますので、後藤先生がそういった意味で使ったのではないということを確認させていただけますでしょうか。

○岐阜聖徳学園大学 後藤准教授

強制的なもの、あなたは何年何組だからここに所属しなさいといった意味ではなく、どちらかというとなりがここにいたい、所属したいという気持ちを表す言葉として使っております。

○武藤委員

ありがとうございました。

事務局の資料の中で、所属感、連帯感の育成という言葉が24ページに出てきます。この言葉だけを聞くと、みんなで一緒に頑張りましょうといった意味合いでつくっていらっしゃるのではないと思ってしまうのですが、この言葉だけが先走っていくと、現場が間違っただけで捉えないかと少し心配になりました。せっかく後藤先生のお話でも所属感という言葉が出てきたので、イメージとしては、子どもの自主的な気持ち、感覚という捉え方をすればよいですね。

○岐阜聖徳学園大学 後藤准教授

事務局の資料を読んで、まとまらなければいけないという所属感は違うのではないかと私も思っていました。草潤中学校には、集団の中にいなければならないということがしんどい子どもたちもいると思います。しかし、そうした子どもたちも所属感を感じられるのは、言いたかったことが言えて、それぞれが別々のことをしていても認めてくれるからここにいたいという意味での所属感だと思って読んでおりました。

○武藤委員

先生、ありがとうございました。

私も同じ感覚を持っていて、今までの学校というのは、一つのことに向かってみんなが団結してやっていこうという価値観がどちらかというと重要視されてきて、それに比較的順応できる子どもたちが活躍をしてきた一方で、そうでない子どもたちが息苦しさを感じて不登校や問題行動になっていくという状況がやはりあったのだと思います。それに対して、それぞれの子どもたちが、それこそ草潤中学校のようにありのままの自分でいてもいいと、自分を認めてもらえる場所だからそこにいようと思う、まさにそこにいたいという意味での所属感を感じられるような学校にしていかなければならないと思いました。それが学校としても求められていますし、学校の先生自身がそれでもいいなという感覚になっていかないと、現場はなかなか変わっていかないと改めて強く感じました。

草潤パッケージの展開については、草潤中学校の開校当初から、教育委員会の中でも再三にわたってお話をしてきたところです。開校から約1年半、先ほどの市長のお話にもありましたが、草潤中学校は確実に成果を上げていますので、子どもたちがここにいてもいいと感じる雰囲気、あるいは仕組みをつくることについて、他の小中学校にも展開していただきたいと改めて強く感じています。

また、後藤先生のご講演を聴く中で、学校の先生も、援助要請や相談をすることが苦手なのではないかと感じました。先生も一生懸命やっただけなのに、何か失敗を恐れ、このようなことになってはいけない、あのようにはいけないなどといった意識にとらわれ過ぎて、先生自身にも手詰まり感があり、それが子どもたちにも影響しているのではないかと感じました。先ほどのスクールカウンセラーに丸投げのような話はまさにそれだと思いますが、先生方がそれぞれ頑張っていたかできないといけない部分はあるも

の、例えばカウンセラーであれば、先生ではできないところをどのように補っていただけるかを相談し、連携する環境をつくっていくことが重要です。後藤先生のご講演の中にも、カウンセラーと意見交換していただいて、制度に反映させていくことが大事だというものがありました。カウンセラーだけでなく、外部の専門家や現場の先生方からも意見を出していただくことで、よりよい制度にしていけるのではないのでしょうか。また、そうすることでネットワークが生まれ、制度を整えた後も、気軽に外部の専門家から率直な意見を言っていただけるという環境づくりにもつながります。こうした取り組みを進めることで、より実効性が高まっていくとともに、先生方の気持ちにも余裕ができれば、子どもたちへも余裕をもって対応できるのではないかと思います。そして、子どもたちとしても、先生に相談できるという気持ちを高めていくということが期待できるのではないかと感じました。

不登校に関するデータについては、新たな視点で見直すための有意義な御示唆もいただきましたので、そういった視点を活かしながら、不登校対策、あるいは不登校児童生徒への支援について、引き続き教育委員会の中でも考えていただきたいと思っております。

以上です。ありがとうございます。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、横山委員、いかがでしょうか。

○横山委員

後藤先生、貴重な話をありがとうございました。

後藤先生のご講演を聴きながら、自分が保育園や小学校、中学校に通っていた頃を思い出していましたが、今何故不登校が多いのか、やはり私には分かりません。事務局の分析の中で、無気力、不安がかなり強調されていましたが、そこもなぜなのかよく分からないという感想を持ちました。私は長く役人をしておりましたので、つい現場をしっかりと見ずに表面的にまとめてしまうところがあるのですが、やはり教員とスクールカウンセラーが一体となってやっていくことと言葉ではきれいに言えますが、実際、現場ではうまく機能していないことのほうが多いことを実感していました。

本日は、学びの視点からの不登校児童生徒への支援、今後の在り方がテーマだと思いま

すが、様々な理由で学校に行けなくなっている不登校児童生徒の学びを保障するためには、まずは学びの場所が必要です。今行くことができない学校以外の場所が必要になりますが、その場所については、公私を問わず様々に提供されています。そうした中で、先ほどの草潤中学校の説明を聞きまして、特例校の設置に関する制度を活用して岐阜市一步踏み込んだことは、1つの積極的な取組だと私は評価しますし、こうした踏み込んだ取り組みをぜひ続けていくべきだと思っております。

草潤中学校は、特例校の設置に関する制度を活用した学校ですが、私は、他の学びの場を提供する手段として、いわゆる小規模特認校制度の活用も一つの手ではないかと考えます。小規模特認校制度は、様々な特色ある取り組みをしている小規模校に、その学校の通学区域以外の児童生徒が通えるという制度です。この制度の一義的な趣旨としては、小規模化によって学校が統廃合の対象となってしまうということに対して、通学区域を弾力化させることで、児童生徒数を増やし、学校を存続させていくというものですが、この制度を利用して不登校対策を行うことも一つではないかと私は思っています。

また、先ほど後藤先生が、赤い部分と青い部分の話をして下さいましたが、これは子どもだけでなく誰にでもあてはまることだと思います。例えば昔の部活動では、欠点ばかりを指摘するような指導が多かったと思いますが、今後は学びに関しても得意なところを伸ばすことに重点を置き、よいところを伸ばすという姿勢で教育を進めていくことが大事ではないかと思いました。

不登校児童生徒に限らず、最終的にはそれぞれの子どもが自立して、何かしらの職業に就くことにつなげることが本来的な支援だと思います。既に草潤中学校で取り組んでいると思いますが、日頃から不登校の子どもたちそれぞれの学習計画をつくり、それを子どもと先生が確認しながら歩いていくということが大切ではないかと思っております。

私の発言は以上でございます。ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、伊藤委員、お願いいたします。

○伊藤委員

後藤先生、本日は、貴重なお話を聴かせていただきありがとうございました。

不登校の児童生徒だけでもあれだけの割合がいますので、不登校傾向も合わせると決して少数派ではないということが明確に言えると思います。私の身近なところだけでも何人もいらっしゃいます。みなさん様々な思いをお持ちですが、その中に、今年になってから愛知県の学校へ通うようになり、岐阜市から毎日送迎をしている方がいらっしゃいます。その方から以前いただいたメッセージの一部を御本人の許可もいただいて、今回御紹介させていただきます。「学校は、どのような個性の子でも安心して学ぶことができる場所であるべきだと思います。大人の理想を押しつける教育ではなく、先生や親は、子どもそれぞれのペースで学ぶことをサポートする立場でいるべきだと思います。苦手なことがあって当然、全員同じことができなくても当然です。それを教師が当たり前のこととして受け入れて、できないことを悪だと思わないでいただきたい。」というものです。この方は、何かこの子のために打つ手はないかと思い他県まで通っていますが、今、公教育は、学校へ行くことが目的ではない、逃げてもいいという方針にかじを切りつつあります。しかし、実際に学校から逃げたとしても、それで子どもたちや保護者は満足できるのか、安心できるのかといたらそうではありません。この先の責任、言葉を変えれば、学校に行かなかった結果のツケが自分にどのように返ってくるかを考えると不安でたまらないのではないのでしょうか。例えば、自分の行きたい学校に行けない、なりたい職業に就けないなど、普通の子どもたちが思い描くような未来が実現できないかもしれないということが大変心配しているはずです。大人が軽々しく、学校を休んでいいよ、学校に行かなくてもいいよと言うことだけではなく、その子本人の未来のために寄り添った代案を出してあげる、それが一番必要なことだと思います。学校に行かないことを肯定するだけではなく、苦しんでいる子の救いとなる選択肢を岐阜市がもっとつくっていかなければいけません。草潤中学校も選択肢の一つです。別室登校ももちろんそうです。しかし、それだけではない取組を、今後はもっと増やしていかなければいけないのではないのでしょうか。学校に行けない子どもたちの、あるいは無理をして何とか学校に行っている子どもたちの漠然とした不安を払拭してあげたいと思います。そして、この代案を提案するのは、不登校の専門ではない担任の先生ではなくて、各学校の研修を受けた先生やあるいは教育委員会の担当者等が、今後について一緒に話し合いながら提案できるような仕組みづくりが必要ではないかと思えます。

その中で、学びの選択肢を増やすため、2つ提案をさせていただきたいと思います。

まず1つ目が、オンライン教育の充実です。今、学校に行けない子どもたちが、当たり

前のように家庭でオンライン授業を受けられるようになりました。これは本当に素晴らしいことだと思っています。先生方の努力のおかげでもあると感謝しています。ただ、今の先生はやってくれているが、来年度の先生はやってもらえないかもしれないという不安が家庭ではあるようです。どの先生になっても、どの学年になっても、どのような場合であってもオンライン授業は継続して実施していくことを、教育委員会がもっと声を高らかに言わなければいけないのではないのでしょうか。

また、先ほど星野課長がおっしゃった、オンライン授業を受けた子どもを出席扱いにすることについて、これによりかなり救われる子がいると思います。ただ、これは広く周知されていないのが現状です。それは、学校に行けるのに出席扱いになるなら行かないといった使い方をしてしまう子どもがいることや、学校に行っていないのに出席扱いになることへの公平性の担保など、課題を整理しきれていないからではないのでしょうか。例えば、朝の会も出席することや、授業の最後に必ずアウトプットをさせて、授業に参加していたことを認める、あるいは、急に今日学校に行きたくないからオンラインにすることではなく、家庭と学校がよく話し合っ、て、医師の診断もいただいた上で認められた子であれば出席扱いにする、といったルールを教育委員会が早く明確にして、活用するべきだと思います。欠席日数が多いという理由だけで、自分が行きたい高校に行けない場合が多々ありますので、そういったことがないようにしてあげたいと思います。

2つ目は、校内での多様で充実した教育の提供です。私は、不登校児童生徒の教育とギフテッド教育には類似性があると思っています。昨年度から、ギフテッド教育について国も有識者会議を設置して議論していますが、ギフテッド教育と不登校児童生徒の学びの保障というのは表裏一体ではないかと思っています。しかし、ギフテッドというと、きらきらした天才肌のような肯定的なイメージがあるので受け入れられやすいのですが、不登校というと、ネガティブなイメージになってしまい、不登校の子どもたちが行く相談室や別室登校という言葉にハードルを感じてしまいます。しかし、不登校の子どもたちもギフテッドの子どもたちも、今の日本の教育環境に合わなかった結果であることは、みなさんお分かりだと思います。ひきこもり問題や日本のイノベーションの低さもそこに通ずるものがあると思いますが、ギフテッドの子どもたちの中には、学校になじめなかった子どもも多いと思います。勉強が簡単過ぎることや、友達、同級生と話が合わないから無理して合わせている子どもたちも多いため、そういった子どもたちが一時的に避難して自習でき、また、不登校の子どもたちも通えるような、フリースクールのようなところが校内にあってもよ

いのではないかと思います。本来のギフテッド教育は、専門性の高い方が教育をするということだと思いますが、公教育ですぐに実現するのは難しいことは承知しております。ただ、ギフテッドでも頑張っている子どもたちや無理に何とかこの日本の教育に合わせている子どもたちも含め、どんな子どもたちも使ってよいような肯定的な場所を、各学校に設置していただきたいと思っております。

この2点をまた御検討いただければと思います。よろしく願いいたします。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、加藤委員、よろしく願いいたします。

○加藤委員

よろしく願いいたします。

私は医師をしておりまして、日常的に不登校の子どもたちを診ています。多くの不登校の子どもたちを継続して診ておりますので、どのように育っていくかは自分の中でイメージがあります。不登校と十把一からげに言いますが、それぞれのお子さんによって背景は違いますし、ステージも違います。ですから、草潤中学校に来ている子どもたちは、不登校の中でもそこにフィットするタイプの子だということを認識していただき、草潤中学校のやり方が不登校の子どもたち全員に当てはまるわけではないということをまずは申し上げたいと思います。その上で、草潤中学校は、拡大版相談室だと思っています。個々の学校にいらっしゃるほほえみ相談員の方に会いに学校に行っている子どももいるからです。草潤中学校で取り組まれていることや個々の学校の信頼されているほほえみ相談員の様子を聞く中で、重要なのはどれだけ個々を見てくれるかということに尽きると思います。実は、不登校もいじめもやるべきことは全部同じで、古くて素朴なことだと言われるかもしれませんが、大事なことは、一人ひとりをしっかりと見てあげることです。子どもを先生に合わさせず、子どもの色を見て、その子どもに合った教育を提供することが原則です。かつての1クラス50人ほどという状況では、そうした教育は難しい状況でしたし、逆に少し放置してくれて楽だったというような時代だったと思っています。

しかし、少子化が進んだ今の時代、私は個々に合わせた教育が可能になりつつあるのではないかと考えています。今は1クラス2, 30人の学級が増えてきました。先生1人で1

日に特定の子ども1人ずつを集中してみていくと、月に1回ずつ、年間を通してそれぞれの子どもを見続けることができるのです。これだけで、一人ひとりに寄り添うことが私は可能なのではないかと考えています。クラスの人数が少ない分、もれなく全員に同じ方向を向かせるということではなく、クラスの人数が少ない分、先生がそれぞれの子どもに合わせることはできるのではないかと考えています。しかし、今の先生方は、やらなければならないと思い込んでいることが多く、やったほうがよいことまで全部やろうとしているのではないのでしょうか。義務教育期間の子どもを育てるということは、根から幹を育てるということで、実をならせることではないような気がします。早く実をならすと、木は細くなります。この子ども時代に何をやらなければならないかをよく考えた上で、優先順位をつけて取り組むことが非常に大事だと思っています。

不登校には様々なステージがあり、最悪の状態の子は、社会的に瀕死の状態です。そうした生きるか死ぬかという状態の子どもは、学びをする状況にはありません。トラウマとフラッシュバックの中で、日々暮らしていることがやっただという不登校の子どもたちも実は大勢います。先ほどの後藤先生のお話で、SOSの出し方の教育は、低学年から継続して実施しないと意味がないというものがありました。私もまさにその通りだと思っていて、私が診ている子どもたちの中にも、小学校低学年の頃に、SOSを出したら叱責されたという経験を持つ子どもたちが大勢います。ある子は、小学1年生のときに授業の途中でトイレに行きたくなったので、手を挙げてトイレに行きたいと言うと、何で休み時間に行っていないの、今は行かせませんと言われたそうです。その子は、その後学校へ行っていましたが、中学生になって不登校になっています。これは、後からその時のことがフラッシュバックしているからです。中学生の不登校の子どもたちの話を聞いていると、小学校の先生がしんどかったという話がかかり出てきます。事務局資料にありました、不登校の主な要因のグラフですが、これは当事者ではなく、学校の先生が答えたもので、本当の姿を反映できているか疑問に感じます。また、専門家の立場からすると、選択肢の設定自体にも、無気力・不安や非行といった、結果として現れるものが、実際の原因となる選択肢と同列に扱われているからです。また、原因は一つとは限りません。当然ですが、家庭環境やその子のタイプ、トリガーになった学校での様々な体験等が重なって不登校になるといったことはよくあるパターンです。私の外来では、そうした複雑に絡み合ったものをどうほどいていくか、どこから介入し、誰と連携すべきかを考えながら、一人ひとりに合わせて診ていきます。表面的なデータの奥に真実がありますので、そちらに目を向け

ていただきたいと思います。

草潤中学校の取り組みを一般の学校にどのように活かすかということですが、まず1つは、先生が常に子どもたちから見られているということを意識し、自身の色というものを大事にすることです。集団の雰囲気をつくるのは、実は学校の先生です。子どもたちは、担任の先生の色で動きます。担任の先生がある子どもに厳しい目を向けると、必ず他の子どもたちも、その子どもに厳しい目を向けます。先生の在り方で子どもたちが変わっていくことは明らかなので、それはとても大事なことだと思います。

もう一点は、学級にある暗黙のルール、要するに子どもたち全てを同じ方向に向けようとしているものを、変えることや無くすことです。学校には、この暗黙のルールが多数あります。先生方は、それがあることが当たり前になっているのではないのでしょうか。本当にその前提が正しいかどうか、ぜひ一つひとつ点検していただきたいと思います。その中でも、頭ごなしの叱責は、決してやってはいけません。理由を述べさせる、言い訳をさせることはとても大事です。それは、自分がどうしてその行動をしたのか、原因を探る作業だからです。学校では、言い訳をする子は卑怯で、やってしまったことを謝りなさいということで終わりの場合が多いのではないのでしょうか。なぜそれをしたのかも分からないのに、解決策を見いだせるわけがありません。理由を述べさせる、言い訳をさせるということを丁寧にやっていくことで、SOSを出せるようになります。小学校低学年、あるいはもっと小さなときから、頭ごなしに叱るのではなく、どうしてそうなったのか、大人がストーリーを聞くことはとても大事だと思っています。ただし、SOSを出せない子どもの中には、自分の感情を言語化できない子どもや感情自体を感じられない子どももいます。何度も申し上げていますが、様々なステージの子どもがいます。子どもたちは、個々で全く異なるのだという意識の下、一人ひとりを見つめていく必要があるのです。

また、発達障害という言葉がありますが、実は発達障害は特別なものではないということをご存知いただきたいです。先ほどの後藤先生のお話に出てきた、急な変化に対応できない子どもの中には、実は発達障害である子が多くいます。“急な変化に対応できない子ども”というレッテル貼りではなく、どうしてそのようなことが起きているのかを見つめ、対応していく必要があります。そうしたときに、スクールカウンセラーさんの視点はとても大事になりますので、連携していくことは非常に重要です。これまで申し上げてきた、教室で日々行われている、子どもたちの心を傷つけるような指導について取り上げた『教室マルトリートメント』という本が出版されています。この本に書かれていること

と同じことが私の外来でも語られています。教室マルチリートメントを減らすことで、いじめも不登校も確実に減ると思います。全てが当てはまるわけではないかもしれませんが、養育者に必要なのは、叱責ではなく守って育てるという意識で子どもたちと接することで、ぜひそういった目線で教育の在り方を考えていけるとよいと思います。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、川島委員、お願いいたします。

○川島委員

よろしくお願いいたします。

皆さんの話を聞いている中で、考えさせられるところも多くありましたが、まずは自分の考えているところを率直にお話しさせていただきます。

これまでの画一的、硬直的な社会から多様性を認めていく社会へ、といったかけ声の下、学校でも様々なことが進められていますが、恐らくこれを進めれば進めるほど、不登校は増えると思っています。様々な個性を認めていくということは、場合によっては学校にこないという選択肢も容認していくということになるからです。では、そうした社会の趨勢の中で、子どもたちの学ぶ機会をどう確保していくかということが、今回議論すべきことだと私は思っています。

加藤先生のお話の中で、不登校の対応で大切なのは学級を指導することである、というところがとても胸に響きました。学級の中で、少数派である不登校の子どもを受け入れる環境をつくっていくことは、一見すると、そうした少数派のためであるように見えますが、実はこれは多数派のためでもあるのです。私は、義務教育で行われている、集団で学ぶ中で心身を鍛えるという点は、非常に重要だと思っています。このベースはこれからも大切にしていかなければならないと私自身は思っていますが、少数派に属する子どもたちにどう対応していくかが今後は大切になります。多数派だけの社会や文明は、硬直化し、いずれ減びるが、多様性を受け入れ、柔軟性が担保されている社会や文明は、結果として栄えていくと言われています。少し大き過ぎる話かもしれませんが、共通点があると思います。仮に自分が多数派から少数派になったときに、コミュニティの一員としての帰属が担保される社会、学校、学級というものが求められているのであり、学級を指導することはとて

も大切なことだと思っています。不登校対策においては、不登校の児童生徒やその家庭への対応だけではなく、それを受け入れる学校や学級にどうアプローチするかということも極めて重要であることが、今回の会議で理解が深まったところです。そして、まずはそのベースとして、こうしたことを各関係者が共通認識として持つことが大切だと思います。

話は変わりますが、この教育総合会議は、教育に関する課題に対して教育委員会と行政が両輪で取り組むために情報共有し、議論する場であると認識していますので、行政に対して求めていくこともお話をしていかなければならないと思います。あえて言いにくいことを言いますが、不登校の問題は、学校や教師や学級だけではなく家庭にも問題があり、こうした家庭をどう支援していくかという観点を抜きにして不登校対策を語ることはできないと思っています。不登校とは学校に行くか行かないかということである以上、学校を抜きにしては語れませんが、学校現場からそうした家庭に介入することは簡単ではありません。岐阜市の不登校児童生徒への支援については、学校以外にもエールぎふ、福祉、医療等様々なチャンネルで対応策がメニュー化されていますが、初期対応はまず学校、学級で行うべきであり、ここで初動をつかんだ上で、その子どもに学びの機会を提供すべく適切なチャンネルと連携することは、個別最適な教育を提供することの一環だと私は思っています。ですから、初期対応に当たる学校の先生の知識やスキルを上げていくことと、そこから学校の先生とスクールカウンセラー等の連携の中で次の選択肢を児童生徒や家庭に示すことがとても大切だと思っています。伊藤委員のお話の中で、不登校の子どもたちにも将来のキャリアがあるということ、また、横山委員のお話の中で、不登校の子どもたちなりのキャリアをつくるために今何をしなければいけないかということ、あるいは、加藤委員のお話の中で、今は医療でしっかりと心と体を休め、次のステップに進むための準備期間の時期とすることも必要だといったことを踏まえると、個人の今の状況に合わせてこうしたことを考えることが、特に不登校という現場における個別最適な教育の提供になると思います。ただ、こうしたことに実際に取り組むためには、学校の先生は相当レベルアップしなければならないですし、行政側も提供するメニューを増やし、充実させていくことも必要です。

最後になりましたが、エールぎふが最近あまりこの会議で話題にあがらないことを残念に思っています。エールぎふの活用について、もっと議論を深めることを期待しています。

ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、水川教育長、いかがでしょうか。

○水川教育長

後藤先生、ご講演ありがとうございました。

私は、岐阜聖徳学園大学に在籍していた間、岐阜の教育はスタンダード教育なのか、ということを常に考えていました。全国から集まってきた学生が岐阜市の学校に教育実習に行った後、岐阜の子はすごくしっかりしていますね、きちんとしていますね、話すときしっかりと話しますね、といった感想を言うことがとても多かったからです。それは裏を返すと、岐阜の教育の集団性の強さを表しており、他大学の先生と話をしているときにも感じていました。岐阜の教育の特徴は、1人はみんなのために、みんなは1人のためにということを徹底してやることでしたが、そのことが息苦しさを生んでいるということを再セットアップしなければならない時期に来ていると思っています。後藤先生のお話の中で、先生の評価軸に合う子という言葉がありました。学級がそのように動いている側面はないかということに厳しく自問しなければならないと思いました。また、大丈夫だよ、分かる、元気出して、という言葉が、先生の価値観から出ている言葉であるとしたら、子どもには響いていないこともあるかもしれないと思っています。そういった意味からすると、井上校長をはじめ、草潤中学校の先生方は、この2年間、本当によくやってくださっていると思っています。ありのままの君を受け入れる新たな形ということで、本気で受容と共感をベースにしながら、子どもたちの選択を保障しています。まさにこれが、加藤委員がおっしゃられた、一人ひとりをしっかりと見ているということなのだと思います。そうしたことに正面から取り組んでいることが、登校7割、オンライン2割という驚異的なデータに表れていると思っています。

草潤パッケージの水平展開についてですが、一つは、不登校ではない子どもたちにとっても、教室におけるその子らしさの承認が必要だと思っています。現在の公教育においては一斉指導が中心であり、個々に焦点を当てて指導していくことは、効率の点から難しいのですが、それでも学力、興味、関心が違うことを前提に授業を組み立てていかなければならないと思いますし、SOSの出し方についても、どんなときにどうしたらいいのかを子どもたちが学べるよう、日々の授業で取り組んでいかなければならないと思っています。

もう一つは、教育相談室の在り方を変えることです。不登校の子が集まる場という役割だけでなく、責任者を定め、個々に応じた学びを提供する、草潤中学校の分教室のようなイメージで組織化すべきだと考えていますので、施策に反映していきたいと思っています。

川島委員が先ほどお話されましたが、岐阜市には、エールぎふという素晴らしい機関があります。しかし、後藤先生と話をしている中で、専門機関が増えることで分業化され、それによって学校の先生がその専門機関に任せてしまうということが起きていないか、結果としてそれが子どもたちの中の孤立感や寂しさにつながっていないかということについては十分留意しなければならないと思っています。また、後藤先生のお話の中で、コロナ禍で新たにこぼれている層があるのではないかということについては、しっかりと見ていかなければならないと思います。

ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

時間は超過しておりますが、これまでの御意見等を踏まえまして、後藤様にもぜひ、お言葉をいただけますと幸いです。

○岐阜聖徳学園大学 後藤准教授

皆さん、ありがとうございました。

実際に草潤中学校にも行かせていただきましたが、選択することについて、よさと難しさの両面があると感じています。加藤委員のお話の中にもありましたが、不登校の子どもたちには様々な段階があり、中には選択さえ難しい子どもたちもいます。草潤中学校では、そのコンセプトに合うだろう選択のできる子を選んでいるということでしたので、そこはやはり必要なところだと思いますし、それによってよい結果が出ているところもあるのではないかと思います。ただ、事務局や委員のみなさんもおっしゃったとおり、草潤中学校のよさを一般の学校にも活かすためには、一人ひとりをしっかり見て支援すること、受容し支援するというのを、大多数に対して行う公教育の中でどう実践していくかを考えていかなければならないと感じています。

教育長のお話にあった、教育相談室をどうすれば草潤中学校のコンパクト版にしていけるかということについては、教育相談室の先生に対してどのような研修が必要で、先生自

身がどのような努力が必要かを改めて考えなければならないと思います。現に各学校の相談室の先生によって、対応や取り組みがばらばらな印象がありますので、草潤中学校での成果を教育相談室の運営に生かしていくという点は、面白く、そして大事な視点であると感じました。

ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、市長、お願いいたします。

○柴橋市長

本日はどうもありがとうございました。

岐阜市の総合教育会議らしく、多様な熱い議論がここで展開され、私は大変うれしく思っております。

後藤先生、貴重なお話をありがとうございました。先生の様々なお話の中に私も気づくことが多くありました。今、私は様々なところで学びの共同体、子ども同士が学び合うことは大事だということを一生懸命宣伝しております。先生がおっしゃった援助の要請につながるものが、まさに学びの共同体の中で、子ども同士で得意なことを活かしながら、教えてあげたり教えてもらったりする中で育まれているのではないかと、実際に学びの共同体の様子を拝見する中で少し感じていたところです。深刻な問題ではなく、分からない、助けてほしい、力を貸してほしいことを形にして仲間に伝えることを学ぶには、この形がよいのではないかと感じておりました。

委員の皆様方からも本当に多様なご意見をいただきました。先ほど武藤委員が所属感というところで触れてくださいましたが、この所属というキーワードは選択理論にも用いられており、5つの基本的欲求の一つに、愛と所属の欲求があります。一方で、その中には自由の欲求もありますので、集団に所属したいという欲求が強い人もいれば、自由に一人でやりたいという欲求が強い人もいる等、欲求のバランスは個々で全く異なります。それぞれに強弱があったり、濃淡があったりするのです。だからこそ、一人ひとりがどういう子どもなのかをよく見ながら、一人ひとりの欲求充足に努めていくことが大事であるということを、お話をお聴きしながら感じたところです。

また、川島委員から家庭に関するお話がありましたが、学校、家庭、地域、全てが子どもたちの当事者である中で、行政側から見ると、子どもたちが小中学校に通っている義務教育の期間は、学校がフロントラインにいますので、学校との関わりが一番多くなります。一方で、子どもたちが生まれる頃には母子保健の世界があり、岐阜市の保健師が家庭訪問して、親子の様子を見るというところから始まります。また、大人になったときに働きづらさや生きづらさを感じている方が働ける環境をつくるワークダイバーシティーの取り組みや、いわゆる8050問題に対する取り組み等、人生の様々なシーンでそれぞれに支援する団体があり、そこに行政も関わり、地域や企業にも関わっていただきたいと考えています。本日は教育の立場から様々な問題提起をいただきましたが、行政として、私たちが誰一人取り残さない安心できる社会を目指していくことを考えたときに、ありとあらゆる段階にそのキーワードや課題があることを再確認させられました。

最後になりますが、本日は学校現場に対して様々な御提言をいただきました。一方で、学校現場は業務改革を抱えていることと思いますので、あれこれとやることを増やすことで、結果として学校現場がお手上げ状態になってしまつては本末転倒です。学校現場の状況に応じて、新たにこの部分からまずは取り組んでいこうといった優先順位をつけるなど、教育委員会の中でもぜひ御議論いただいて、その上で予算措置の必要があれば、我々行政サイドとも御協議させていただきながら、子どもたちのためにぜひ英知を結集していただければ大変ありがたいと思います。

本日は、貴重な御議論をどうもありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

本日は、多くの御意見を頂戴し、誠にありがとうございました。また、後藤様におかれましては、御多用の中、御出席を賜り、誠にありがとうございました。

それでは、これをもちまして第2回岐阜市総合教育会議を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。

(15時30分閉会)